



福岡県 地域おこし協力隊

▲うきは市矢野隊員(真ん中)。フルーツを使ったパフェづくりのワークショップを開催するなど、うきははフルーツのプロモーション活動に取り組む。



▲香春町隊員。右から三村隊員、小野沢隊員、村上隊員、小玉隊員。半農半Xの実現に取り組む三村隊員の活動の一環で田植えにチャレンジ。

地域おこし協力隊とは

地域おこし協力隊は、人口減少や高齢化等が進む地方において、地域外の人材を積極的に受け入れ、その定住・定着を図るため、2009年にできた制度です。地方自治体の委嘱を受けた地域おこし協力隊は、おおむね1年以上3年以下の期間、地域で生活し、地域協力活動に従事します。

2019年度で約5,400人の隊員が全国各地で活動しています。隊員の活動内容は、観光振興、移住支援、空き家活用や、農林水産業への従事など多岐にわたっています。

寄稿：福岡県企画・地域振興部
市町村支援課

福岡県内の 隊員の活動について

福岡県内でも36市町村で計135人の隊員が、地域住民の協力や自治体職員のサポートを受けながら地域活動に取り組んでいます。

福岡県では、隊員や市町村



▲篠栗町溝口隊員。お寺を中心とした体験型のイベント企画の商品化に取り組む。

職員を対象に研修や交流会を開催し、隊員の活動の活性化や、退任後の地域への定住に向けた就業・起業に対する支援など、隊員へのサポートを行っています。

次ページでは、小竹町で珈琲の商品開発やイベントの企画・



▲糸島市藤瀬隊員と中村隊員(写真右と左から2番目)観光協会主催の地引網に参加。

運営・情報発信に取り組む國房くにふさ雅之さん、宗像市で海女漁の継承に取り組む本田ほんだ藍さん、林はやし由佳理さんの活動をご紹介します。

福岡県で活躍する地域おこし協力隊員の活動の様子をぜひご覧ください。

福岡県移住・
定住ポータルサイト
「福がおくかくらじ」
のご紹介

福岡県への移住・
定住を応援する公式
サイトで、セミナー・
相談会等のイベント
情報や、先輩移住者の
インタビュー記事など
を掲載しています。

このサイト内に、
地域おこし協力隊の
ページを設けており、
県内各地にて笑顔で
頑張る隊員と、隊員
の活動地域の魅力も
満載です。こちらも
ぜひご覧ください。



地域おこし協力隊インタビュー



27歳で脱サラし、2013年から福岡市でカフェを経営していた國房さん。父親が小竹町出身であることが縁で、竹炭を活用した新たな地域特産品「竹炭焙煎 こたけ珈琲」の商品開発に2018年から携わりました。

商品開発の試飲会に参加し



たことが移住を決めたきっかけの一つになりました。「運営を受け持っていたおじいちゃんやおばあちゃんのエネルギーがものすごくて。その熱量に心を動かされましたし、もっと自分もゆかりのあるこの町のために貢献したいと郷土愛が爆発。カフェ経営は順調だったのですが、地域おこし協力隊に応募したんです」。

採用された國房さんが主に担うたのは地域イベントの情報発信強化でした。

イベントの企画・運営や情報発信に取り組み

國房さんは、自身のカフェ開店・経営のノウハウを活かして、例年実施されている「ボタ

小竹町地域おこし協力隊

町をもっと元気にしたいという

思いがスパーク

くにみさ まさゆき
國房 雅之 さん（福岡市出身）

山クロスカントリー」の情報発信や、山の里自然農園ブルーベリー園で行う「そうめん流し」の企画から集客までを手掛けました。「新しいことに挑戦できることは楽しい」と充実した表情を見せます。その一方で、当初は田舎特有のコミュニティが出来上がっている中に入り込む難しさがあったとも。しかし店舗経営で培った営業力を駆使し、住民たちと積極的に交流することで徐々に溶け込んでいったそうです。

「今年はコロナ禍の影響で催事の実施があまりできませんでしたが、状況を見ながら取り組みを進めていきたい」と意気

込む國房さん。さらにこう言葉を継ぎました。「小竹町の自然の豊かさは大きな財産です。私は移り住んで鼻炎も和らぎ体調が良くなりました。多くの方にお越しいただけたらうれしいです」。



2019年度「ボタ山クロスカントリー」の様子



竹炭焙煎珈琲

地元の魅力を発信したい

宗像市地域おこし協力隊

海女漁や広報活動、

食堂運営など多彩に活動

本田 藍さん(左)(京都市出身) 林 由佳理さん(右)(愛知県知立市出身)

日本海沿岸の海女発祥地

と言われている鐘崎を有する宗像市。地域おこし協力隊に求めたのは減少が著しい「海女」になってくれる人でした。滋賀県で高校の生物教師

をしており、ダイビングが趣味の本田さんと、愛知県のメーカーに勤務しつつ、サーフィンに熱中していた林さんは、「大好きな海の近くに住んで生計を立てられるのは魅力的」と共に志願。応募者9名の中から選ばれ2018年4月から活動をスタートしました。

海女漁の習得はもちろん、鐘崎海女の認知度アップを目的に市の様々なPR活動に従

事しています。さらに海産物のブランド化や獲れたての魚介類を味わえる「あまちゃん食堂」を漁協の方々と一緒に立ち上げるなど幅広く活躍中です。

地域の人が喜んでくれるのは大きなやりがい

海に慣れていった二人でも、素潜りができるようになるまでかなり訓練を要しました。潜れるようになって、ナマコを見つけるのに苦労したり、アワビを岩からはがすのに苦労したり。いろいろ大変なこともあるけれど「頑張るほど地域の役に立つことや、海女漁の技術がだんだん上達する喜びなどやりがい

大きいです」と口を揃えます。

また二人は宗像のまちも気に入っているよう。「人と人の距離が近くて、アットホームな近所付き合いができます」と林さん。「それに加えて海も山もあり住みやすいです」と本田さん。今後について尋ねると、本田さんは「まず海女として独り立ちしたい。さらに学芸員の資格を活かし、文化施設で海女の資料などの整理ができれば」、林さんは「海女漁に加え、特産品の開発なども行いたい」と今後を見据えています。



「あなごのかき揚げ」が評判となったあまちゃん食堂



ウニ漁の様子